
駆竜人ピウイ 竜のいない竜洞

青河 康司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駆竜人ピウイ 竜のいない竜洞

【Nコード】

N2952Z

【作者名】

青河 康司

【あらすじ】

かつて天駆ける飛竜に乗り、竜をも射殺す弓を手挟む民として勇名を馳せたポロワ族。いまやそれも架空の伝説と化し、高い文化を誇りながらも樹海に屹立する山城でほぞぼそと暮らす日々。その少年ピウイが猿虎のガレにまたがり、仲間とともに一族に隠された秘密と、迫り来る脅威に挑む。沈城湖をとりかこむ樹海地方を駆け抜けるピウイの弓がうなる冒険活劇。

東壁山の峰が南へとなだらかに樹海の沈む交点を中心に、桃色
と紫色が空を染め始める。

沈城湖（地元の者は堀の湖と呼ぶ）を取り囲む樹海を覆う夜を、霧
を、光が切り裂き始める。

春も半ばを迎えたとはいえ、この時刻はまだ気温は低く、しかも高
く成長することで知られる

紅杉の先端付近は、地上からでは想像も付かぬほど風が強い。ピウ
イはこの冷たい

風が好きだった。体を引き締め、気持ち奮い立たせてくれる。枝
の上で膝をかかえ幻想的な

空の変化に眼を細め感じ入っているその横で、猿虎のガレは干し肉
の味に感じ入っているようだ。

ガレはピウイの作る干し肉が気に入っているようだ。爺さまから作
り方を仕込まれたことを

嬉しく思う。北壁山の前に広がる樹海にも陽が回ってきた。根を樹
木の先端に絡ませば

下がり一晩を過ごしていた大蓮浮き草があちらこちら浮かび始めた。
光をできる限り浴びて

浮力を得ようとその大きな体を傾けている。さて、そろそろだろう。
細めていた眼に

凜々しさが宿る。朝日を浴びるその横顔は端整とっていいだろう。
が人懐こさが滲んでいる。

簡素ではあるが彫金のみごとな兜をかぶり、背にある折りたたまれ
た弓を手にする。

ガレが少量の干し肉を食べ終わったようで、こちらをじつと見る。
拒絶のしかめっ面をすると知らぬ顔でその器用な前足を丁寧に

舐める。突然首をもたげ、耳を立てると、

「ポオロオワー！」

お目当てのもの的一声が響き渡った。鳴き終わる前からピウイはガレに飛び乗り、紅杉をぐるぐると巻きながら下へと向かっている。

声の様子からかなり大型のポロ鳥だろう。猿虎は平地を行くがごとく枝から枝へと歩を進める。並足から早足へと、ピウイの体の下でうねる

筋肉がリズムを上げ、白い吐息が頬を撫で後方へ飛んでいく。

枝の隙間からチラリと動くものが見えた。と同時にガレは持てる力を徐々に解放し始める。ポロ鳥は気付き、あわてて飛翔した。この込み合った

木々の間を短い羽で器用にすり抜ける。猿虎もそれを上回る旋回能力発揮

し始めた。ガレの取るコースを先読みしていなければ振り落とされてしまう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2952z/>

駆竜人ピウイ 竜のいない竜洞

2011年12月10日14時49分発行